

また逢うために Meet Again Someday

藤田雅史

シーツの波打ったところを、指先で押しつぶすようになでる。汗で湿った綿の生地が、すうと小さな息を吸うように平ぺったくなり、朝の光を集めて白く、まぶしい。

目が覚めてから、どのくらいの時間が経過しただろう。

枕元の眼鏡に手を伸ばすのがおっくうで、まだ時計も見えていない。ただ、窓から差し込む光の角度やシーツの白さの感じから、だいたいの時間帯はわかる。少なくとも、会社の始業時間をとうに過ぎている、ということくらいは。

私は腰のあたりでまるまった（ずっと尻のあたりをむずむずさせていた）薄掛けを頭までぐいと引き上げ、そのなかで胎児のように膝を抱いた。

これで無断欠勤は二週間になる。ここままではクビになるだろう。いや、もうすでになつているのかもしれない。でもいまの私にとつて、それは全然たいした問題じゃない。

世の中の物事の価値はすべて、相対的にしか決まらない。いちばん大事なことの隣にもっと重要なことがやってきたら、いちばんは、いちばんではいられなくなる。

毎朝会社に行く、というのは、思えば大学を卒業してからの私の、いちばん、だった。それを怠ると、社会から除けものにされる。ハブられる。ご飯を食べることより、丁寧に化粧することより、スマホの充電を切らさないことより、まず、毎朝ちゃんと起きて会社に行く。それが最も大きな問題だったような気がする。それはもう、強迫観念といっていいほどに。くそまじ

めなのだ、私は。

サトウユウジとは同期で入社した。

その年の新卒採用は、私たちふたりだけだった。

彼は営業部で、私は制作部。部署が違うので頻繁に顔を合わせるわけではなかったが、フロアの共用コピー機が並んでいることや、社員の休憩スペースとなっっている階段下の自動販売機のあたりで、ときどきお互いを見つけては、短い会話を交わした。

「おっ、ヤマグチ、おつかれっす」

軽い調子で声をかけてくるのが彼のいつもの挨拶で、私は毎回それに、「そっちもね」と素っ気なく返すことにしていた。彼はそのあとたいてい、「で、どう？」と、ざっくりとした質問をしてくる。私は、そのとき仕事が忙しければ忙しいと答え、眠たければ眠いと答え、どうって具体的に何についてだよと思えば、どうって何についてだよ、と冷静に返した。

「どうってほら、あ、野坂部長、会社辞めるって本当？」

「え、知らないよそんな話。誰が言ってたの？」

「総務の山岸」

「あー、それたぶん、部長の娘さんの話だよ」

「え、娘さん今年就職したばかりじゃなかった？」

「なんかね、上司にセクハラされてんだって。部長がこないだの飲み会で怒ってた話だと思うよ。山岸くん、その場にいたし」

「なんだ、そっか。でも、野坂さんの娘さん美人だもんなあ」

「見たことあんの？」

「あの人の娘自慢は有名でしょ。あの子が部下だったら、ちょっとセクハラっぽい発言をしたくなる気持もわからんではない」

「なんじゃそら」

「野坂さんに似なくてよかった、って話だよ」

「意味わかんないよ。まあ、私もその点は同意するけど」

他愛ない会話ではあるけれど、張り詰めた空気が充満している会社のなかで、緊張することも気を遣うことなく話ができるぶん、そのやりとりは仕事の息抜きとして貴重だった。私はときどき作業に煮詰まると、トイレに行くふりをしてふらりと席を立ち、コピー機のそばを通ったり、自販機の前まで歩いたりして、彼の後ろ姿を探したものだ。

三十を過ぎて結婚できない女があふれかえっているこの時代、若くて仕事ができても人柄もまあよくて話しやすく顔も十人並みの男であれば、女が放っておかない、という話になりそうなものだけれど、あいにく、ユウジの周囲には浮いた噂がまったくなかった。彼自身が「あー、俺いつまで彼女できないんだろ」と、コピー機に片肘をつけて物憂げに嘆いていたくらいだから、それは本当だ。

とはいえ、何事にも理由はあるもので、ユウジに彼女ができない原因は、大きく三つある。

ひとつは、彼がウルトラ怪獣オタクで、それを彼自身が公言してはばからないこと（自分のスマホだけでなく、会社支給のスマホも、PCのデスクトップも、怪獣の壁紙を使用している。業務上相応しくない、とか、ひとに見られたら恥ずかしい、みたいな意識はないらしい）。

もうひとつは、オタク趣味と相まって洋服のセンスが激烈に悪いこと（これは入社当初からネクタイやワイシャツや鞆のセンスがなんかやばい、いかにもだ、と噂になり、その年の夏の社員バーベキュー大会で複数の女子社員により確定された）。

そして最後は（これがいちばんの原因なのだが）、大学時代に付き合った恋人のことをいままも変わらずにずっと想い続けていること、だ。

ヒカルちゃん、という元彼女の名を、彼は会社の飲み会で酒に酔う度に口にする。「俺はエレキングが永遠の第一位なんすけど

ヒカルはゼットンだとかツインテールだとかメトロン星人だとかぶれまくりなんすよ、どう思います？」って、そんなの聞かれてもどうとも思わねえよばか、という類の話を、真つ赤な顔でジョッキを傾けながら延々と続けるので、まわりの社員のみならず、社長から派遣さん、バイトの子にいたるまで、いまや「ヒカルちゃん」の名を知らぬ者はいない。へたをしたら取引先にまで知れ渡っている。

ただ、それがあからさまな嘲笑の対象とならずに済んでいるのは、その元彼女が、もうこの世に存在しないからだ。

ヒカルちゃんは、彼が大学四年生のとき、交通事故で亡くなった。高速道路でバスがガードレールに激突し死者を出した悲惨な事故。私もニュースで見た記憶がある。そのときの犠牲者のひとりが、ヒカルちゃんだった。

彼と付き合うと、もれなくウルトラ怪獣のフィギュアコレクションと、オタク的なファッションセンス、そして「ヒカルちゃん」という背後霊がついてくる。それは女の側に見れば、ずいぶんと重たい荷物を背負わされるような、面倒くさくて薄気味の悪い話なのだった。

そんなユウジを、ヒカルちゃんが手招きした。

春の終わり頃、いつものように共用コピー機の前で偶然隣り合わせたときのことだ。私は手描きのイラストをスキャンしないとイケない用事があった、複合機を使いに行った。すると、隣のモノクロコピーだけの古い機械を、ユウジがひとりで使っていた。

複合機に原稿をセットしながら顔を向けると、ユウジと目が合った。ところが彼は私のことが見えているのか見えていないのか、ぼうつとしたまま「おつかれっす」も「で、どう？」も言うてこない。そこで私の方から「おつかれ、最近どう？」と話しかけてみた。しかし、それでも反応がないので（ただぼさつと突っ

立ってる、という感じだった）、「ちよつと、ユウジ、大丈夫？」と腕をつかんで揺すった。

「やばい」彼はようやく小さな声でつぶやいた。

機械の故障かと思ったが、コピー機は特に何の問題もなさそうに、間断なく快調に出力紙をはき出していた。年度末も近いことだし営業成績のノルマの方の話だろうかと思われ、勝手に想像した私は、ちよつといじめちゃおうかな、という感じで、「数字？」と彼の顔を覗き込むように訊ねてみた。

「数字といえば数字だけど、正確には、数値」

「数値？」

首をかしげると、彼は表情のない声で言った。

「少なくとも営業ノルマとかそういう次元の話じゃない」

「相変わらず意味わかんないよ」

「俺さ、要再検査だったんだよ。健康診断」

「へえ」

「で、行ってきたんだよ」

「うん」

「やばいって。俺、死ぬって」

私は他の何の説明を受けずとも、その乾いた声のあまりの湿り気のなさに、すべてを理解してしまった気がして、息をのんだ。とりあえず冗談に受け取って笑うべきか、それとも悲劇的な感じに驚くべきか、そんなことを考えているうちに、「へ？」と、唇のあいだからまぬけな音が漏れた。死ぬ、という言葉が、現実感のあるものとして使われる場面に、私はそのときはじめて遭遇した。

ユウジは、とにかく事実を並べる、と決めたふうに、「こんな年齢なのに悪性の腫瘍が見つかった」「間違いないらしい」「しかもかなり進行している」「とりあえずこれから専務と部長とミーティングルームで話し合いすることになった」「親にはまだ言っていない」というようなことを、コピー機のディスプレイに視

線を固定したまま淡々と言った。

「うそ。だって、ユウジ、去年の検査、普通にBだったって言うってじゃない」

「うん、Bだった。去年は確かにBだった」

「意味わかんないよ」

「俺もわかんないよ」

私は、彼の前のモノクロコピー機が、さつきから延々と同じ内容の出力紙をはき出し続け、まったく止まる気配がないことに気づいた。ディスプレイを覗き込むと「あと486枚」と表示されている。いったい何枚設定したんだよお前。紙を無駄にするよ。た総務に怒られるよ。

私が胸の内ですんな現実的かつ些細な問題に逃げ込むと、それを合図にするかのように、彼は突然いつもの表情を取り戻し、以前と変わらぬ素っ気なさで、

「でもね、ヒカルに会いに行けるってことだよね」

と、はにかんだ。

「え？」

「ヒカルが呼んでくれてるんじゃないかって。そう思えば、受け止められる気がするんだよね。こういうことも」

私は何も言い返せなかった。

「ねえ、ヤマグチ」

ユウジが私に声をかけてきたのは、その週の金曜日、定時に会社を出て、駐車場の隅にとめてある自分の車に乗り込もうとしたときだった。

社外でユウジから声をかけられるのは珍しいことで、西日を背負った彼の姿はもう別の世界の何かのようにまぶしく、私は一瞬ドキツとして、「一、二歩後ずさってしまった」。

「ちょっと頼みたいことがあるんだけどさ」

「え、うん、なに？」

「俺、このままじゃよくないと思うんだよね」

「えーと、それはどういう意味で？」

「いや、服とか、髪とか」

「は？」

「アドバイスが欲しいんだ」

何を言っているんだろうこの人は。私は頭がくらくらした。

とりあえず彼を車に押し込み、近くのファミレスに連れて行って落ち着いて話を聞くと、つまりはこういうことだった。

自分はもうすぐ死んでしまう。その遠くない未来の事実は、ヒカルちゃんに会いに行く、という解釈でなんとか成立している。そうになると、自分がヒカルちゃんと顔を合わせるのは、彼女がある日突然命を落として以来、六年ぶりのことになる。久しぶりの再会は緊張する。できれば天国にいる彼女から、「付き合ってたときよりもいい男になった」と思われたい。ところが、今着ている服や髪型は鏡に映すと目を覆いたくなるほど野暮ったく（それは彼なりに自覚していたのだ）、だから新しい服を買い求め、男としての価値を上げたい。自分の成長ぶりを見せつけたい。でもセンスがないから、どの店で何を選んで買えばいいかわからない。そこで、同じ年の女性である（イコール、ヒカルちゃんとも同じ年の）私の助言が欲しい。というか、頼むから一緒に買い物についてきてくれないか、というものだった。

「頼む。リアルに一生のお願い」

「そういう冗談やめて」

「全然冗談じゃないから。頼むから」

「いや、まあ、いいけどさ」

「ありがとう」

「でも、どういうお店がいいの？」

「そういうのもみんなヤマグチに決めて欲しいんだ。高くても全然いいから。いままで給料ほとんど貯蓄してたから、まじで金

に糸目はつけないよ」

「うわ、すごい台詞」

「言ってみたかったんだ」

「もう一回言つて」

「金に糸目はつけないよ」

「もう一回」

「金に…もういいよ」

いつ何が起ころかわからない、とユウジが言うので、さっそく週末から買い物に付き合うことにした。

私は、人混みはできるだけ避け、体力を消耗しないように手早く済ませた方がいいだろうと考えて、朝早くに車で彼の実家まで迎えに行つた。

というか、買い物なんかしていて大丈夫なんだろうか。入院とか投薬治療とか、よくわからないけれど、そういうことが必要なんじゃないか。服なんてネットで買えばいいんじゃないのか。

「いやなんかもうさ、薬痛いし頭はげるっていうから、俺、そういうのいいや、つて断つた」

助手席の彼は、まるでコピー機で隣り合わせたときと同じような口調で、飲み会の誘いを断るみたいに軽々しく言った。

とりあえず人の少なそうな土曜の開店時間を狙って、有名なセレクトショップへ連れて行くと、店の前に立った途端、急に彼の顔色が悪くなり、表情がこわばつたので私は焦つた。

「大丈夫？ 救急車とか呼んだほうがいい？」

「いや俺、こういう店入つたことないから緊張して。いや、アウエーだわ、これ、完全アウエーだわ」

お洒落なイケメン店員の視線から逃げるように顔を背ける彼は、なんとというか、純粹に情けなく、かわいかった。

ファッションに興味のない人は、気の利いたコーディネートなんてどうせできないので、私はできるだけシンプルでスタンダー



ドで、誰が着てもそれなりの見栄えになるものをいくつか見繕い、彼を試着室に押し込んだ。

かたちのきれいなボタンダウンのオックスフォードシャツに、軽めの紺のジャケット、リラックスした抜け感のある麻混のロングカーディガン、着回しの効く半袖のバスクシャツ、ノンウオッシュのデニムとスリムなチノパン、上品なブラウンのプレーントウの革靴と、アディダスのグレーのガゼル。

まあまあ背の高い彼は、どれを合わせても私の目論見通り、それなりにきれいに似合った。

「いいじゃん」

「なんか俺じゃないみたいだ」

「新しい俺、だよ」

「でもこれって、今の季節の服だね。冬まで持ちこたえちゃったらどうする？」

「知らないよ、天国の気候もこつちと一緒なの？」

「いや、わかんないけど」

「秋になったらまた秋物買おう。冬になったら冬物買おう。また買い物付き合っただげるから」

鏡のなかの彼は、新しい自分を発見して嬉しそうにほほえんでいる。くるつと回ってみたり、ジャケットのボタンを照れくさそうにとめたり外したりしてみたり。

でもユウジ、本当はどんな気持なんだろう。

私は、そんなことを思って、現実の恐ろしさに寒気がした。これを着て、昔の彼女に会いに行くなんて、その子どもじみたファンタジーに付き合っている自分が、いったい今、どこで何をしているのか、わからなくなってしまう。

全部レジに持って行って、バッグとベルトと靴下、帽子、香水、ハンカチもついでに一緒に買った。総額は私の一ヶ月分の給料よりも高かった。

「あ、あと俺、パンツも買いたい」

「え、パンツならジーパンとチノパン買ったよ」

「じゃなくて、えーと、下着の方の」

「それは自分で選んでよ」

それから、ユウジは私を誘っては、自分磨きに励んだ。

床屋でしか髪を切ったことがないので美容院に行ってみたく、  
と言うので、私が通っているお店を紹介したら、特撮ヒーローの  
主人公を演じている俳優の切り抜きを会社のクリアファイルに入  
れて持参しようとしたので、この歳になつてさすがにそれはな  
い、と取り上げた。

「でも何て言つて注文すればいいのかわからない」

「思い切つて短くしたいんですけどー、とか言えば、ヘアカタ  
ログとか雑誌とか見せてくれるから、こんな感じ、つて指させば  
いいんだよ」

またあるときは、デパートの一階に連れて行かれ、ヒカルちゃ  
んにプレゼントするためのアクセサリー選びに付き合わされた。  
ところが緊張のあまり店員とうまくコミュニケーションをとれな  
い彼は、私のことを勝手に恋人に仕立て、私の指のサイズのピン  
クゴールドのリングを買うという意味不明な行動に出た。

「これ、ヒカルちゃんの指にサイズが合う可能性、かなり低い  
と思うよ。私の指、ふつうの女の子より太いし」

「いや、いける気がする」

「いやいや、何その思い込み」

「大は小を兼ねるつて言うし」

「いやいやいやいや」

それは不思議な時間だった。客観的に見れば、ただの現実逃避  
なのだろう。現実を受け入れられなくて、その事実にとどり着く  
までの時間を、作り話で埋めようとする。でも、私にとってそれ  
は、不思議なことに、それまでの私の人生のどの瞬間よりも、生  
きていることを感じることできる時間だった。

それから本格的な暑い夏が来て、ユウジの体調は、少しずつ確実に、よくない方へと傾いていった。お盆休みを過ぎると会社にはもう顔を見せなくなった。

私はときどきメールを送ってみたが、それが返ってくるのは三回か四回に一度、それも短く素っ気ないものだった。

最後に彼に会ったのは、彼の実家のファミレスまで届け物をしたときだ。美容院で買った整髪料がもうなくなりそう、というメールがある日届いたので、私は行きつけの美容院に電話で注文し、それを買って届けたのだった。そこで三十分くらい、他愛のない話をした。

「俺さあ、死ぬ前に会社の誰かに伝えておきたいことがあるんだけど、いいかな」

「引き継ぎ的なことなら営業の人に言つてよ」

「そういうんじゃないぞ」

「じゃあはい、どうぞ」

彼はドリンクバーの健康緑茶をすすりながら、

「野坂部長つてき、イカルス星人に似てるんだよね」

と深刻な顔で言った。

「何だよそれ、知らないよ」

彼は「いま送る」と言いながらスマホを素早く操作し、「見てみて」と送信ボタンを押した。

メッセージのアプリを立ち上げ、送られてきた画像を見ると、そこにはどアップの怪獣の顔があった。

像のような巨大な耳と、もう市販のひげ剃りで剃り落とすことは不可能なんじゃないか、というくらいに密生したあご髭が特徴的な、それでいて顔は半漁人のような（半漁人を実際に見たことはないが）変な顔の怪獣がそこにいた。

「うわ、野坂さんに激似じゃん」

「でしょ」

「ウケる」

「俺が死んだらさあ、この事実を会社の誰も知らないまま、みんな、野坂部長と一緒に仕事するわけじゃん。それって、どうなん、って思ってる」

「どうなん、って言われても」

「いやいや、どうなん、って思うわけよ。知っている身としてはさ」

「大丈夫。私が知ってる」

「うん、安心した。入社してから、ずっと誰かに言いたかったんだ」

それから二週間後、ユウジはこの世を去った。

通夜があつて、葬儀があつて、私は会社の人間として、上司と一緒に参列した。いちばん後ろの席でじつとお経を聞いて、お焼香に並んで、出棺まで見届けた。

白木の棺が男の人たちの手で運ばれていくのをじつと見つめながら、そのなかにおさめられたものを想像した。

大切な思い出の品々やたくさんの花びらと一緒に、新しい服や靴や靴もちゃんと入っているだろうか。怪獣のフィギュアも。なぜか私の指のサイズで作られた、ヒカルちゃんへのプレゼントも。私は、服のタグ、ちゃんとハサミで切ったかな、なんてことを思った。

会えるといいね。

私は棺のなかのユウジにむけて胸の内ですぶやき、唇を血がにじむまでぎゅつと噛んだ。そのときはじめて、私のなかに、ヒカルちゃんに対しての怒りがこみ上げてきた。

許せない。やるせない。むかつく。なんなの、あんた。なんなの、あんた。未練がましく迎えに来るんじゃないやねえよ。ばーか。

そして私は会社に行くのをやめた。

正確には、行くことができなくなった。欠勤の電話すら一本もかけていない。ユウジの葬儀が終わった次の日の朝、私は自分の一部が壊れてしまったことに、はつきりと気づいた。

いちばん大事なことをその場所に置いたまま別の方を向いて、あるいは、シーツを被せるようにひっそりと誰にも見つからないように隠しておいて、目の前にある現実には、いつもの顔で、いつもの態度で取り組むこと。きつとそれが、おとなの所作、なのだろう。

でもいまの私にはそれができない。ユウジの死をいったん横に置いておいて、過去の出来事として覆いを被せて、いつもと同じように職場で働くなんて、そんな芸当できるわけがない。

ようやく、酔っ払うとヒカルちゃんの話をはじめめるユウジの気が、ほんの少しだけわかったような気がした。突然ヒカルちゃんを奪われたユウジもまた、それを横に置いておいたり、覆い隠したりすることができなかつたのだ。

息苦しくなったので薄掛けから顔を出し、白い天井を見上げて、あの向こうに天国があるのかとふと考えてみる。

蛍光灯を取り外し、壁紙を引っぺがしてボードを破壊し、屋根裏の梁もアパートの屋根も吹き飛ばして、大きな穴の向こうの青空をずつとずつといけば、そこにユウジとヒカルちゃんがいるのだろうか。

そろそろ眼鏡をかけようかと手を伸ばすと、指先がスマホに触れた。留守電の通知が二件。野坂部長は私のことを心配して、毎日着信を残してくれる。でも私は一度も電話に出ない。かけ直すこともしていない。

留守電を再生せずに消去して、なんとなくメッセージのアプリを開いた。ある日を境に途切れた、私とユウジのやりとり。最後に彼から届いたのは、イカルス星人の画像だ。野坂さん、もういいよ。私、会社、辞めますから。気づくと私は指を動かして、新

しい言葉を入力していた。

おつかれ。

そつちで元気にしてる？

ヒカルさんにはもう会えましたか。無事に、元サヤに収まったかな。彼女は驚いたよねきつと。まだ、ユウジのことを好きでいてくれましたか。そうだったらいいね。

こないだあげたワックス、香りがいいでしょ。ちゃんともみあげとか襟足のところもつけたほうがいいよ。けっこう高いやつだから、大切に使ってね。ネットでは買えないから、なくなったら私がまた美容院で注文してあげます。

一緒に買い物したり、ご飯食べたたり、会社のコピー機のとこで話したり、楽しかった。私、ユウジのことが好きだったみたい。楽しいのに、つらかった。死んじゃうのわかってるのにどんどん好きになるって、意味がわからないよね。この世界は合理的にはできてないんだ。

こんな長文、死んだ人にいきなり送りつけても迷惑なだけだな、と思ったら涙があふれてきてもう画面を見られない。

我慢していたわけじゃないのに、堰を切ったようにそれはあふれて、頬をびちゃびちゃに濡らしていく。私は声を出さないように、口を思いきり強くシートに押しつけ、ああううああううとくぐもった叫びをあげた。宇宙を彷徨うかなしい怪獣のように。

そのとき、おへそのあたりが微かに震え、メッセージの着信音が、りん、と鳴った。

目をこすって画面を見ると、私の打ち込んだ長文のメッセージの下に、新しい吹き出しがあらわれていた。

〈おつかれっす〉

誰だよ。そう思うそばから、文字が、声を連れてくる。

〈会社行けよ。それで早く、俺のデスクの私物処分してくれ〉

それはユウジからの返信だった。

誰かのいたずらだろうか。でも私は目が離せなかった。身体がベッドから浮き上がり、自分はいま、天国と地上のあいだを浮遊している。そんな錯覚を起こした。そしてそこに、私はなにか、一縷の望み、のようなものを感じていた。

〈こっち来て、けっこう探して、ようやく昨日、ヒカルに会えました。天国のファミレスで待ち合わせて、お茶したよ。彼女全然変わってなかった〉

〈でもそれだけ。昔の話して、それだけ。プレゼント渡すつもりが、そんな雰囲気じゃなくて、渡しそびれた（笑）〉

〈でもなんか、それでよかったかな。あ、服、褒められた。でも髪は、前の方がよかったって言われた〉

〈ヤマグチの気持ちは、なんとなく感じてました。ごめん。いつか、ヤマグチとも、こんなふうにくっちでまた会えるのを楽しみにしてる。ずっとずっと、五十年とか、もっと先でいいけど〉

〈一緒に買ったリング、俺のデスクの左上の引き出しのペンケースの裏に隠してあるから、ヤマグチにあげる。いらなかったら、ネットで売ってそれで美味しいものでも食べてください〉

〈じゃあまあ、また。会社行けよ。イカルス星人がお前のこと心配してる。まじで〉

私はそのメッセージを何度も何度も読み返した。

いたずらにしては、あまりにもユウジの言葉そのままで、ふたりに以外に知りえぬことだらけで、いたずらとはとても思えなかった。

次の瞬間、メールアプリの画面が暗転した。肩がびくつと震える。

着信音。緑と赤のボタン。野坂部長からだった。

私はためらいながらも、緑の通話ボタンを押した。

「はい、ヤマグチです。おはようございます」

そして無断欠勤をひたすら謝って、午後から出勤すると告げた。部長はやさしかった。来週からでいい、と言ってくれた。

電話を切って、ようやくベッドから起き上がる。

窓を開けると、もう秋の風を感じる。あれはなんだったんだらう。もう一度ユウジからのメッセージを読み返そうとしたら、でも、あのメッセージはもうどこにもなかった。どんなにスクロールしても、最新のメッセージは私の打ち込んだもので、最後にユウジから届いたのは、イカルス星人の画像だった。

もしかして、全部私の妄想だったのだろうか。脳みそがおかしくなつて、自分に都合のよいメッセージを頭のなかで勝手に受信していたのだろうか。何なんだ、いったい。

私は小さな胸をふくらませて、大きな息を吐く。とりあえず、ひとまず、入社しよう。今日、ちゃんと午後から入社して会社の人たちに謝ろう。頭を下げよう。そして、確かめよう。

目をつむって、涙をこする。

まぶたの裏の暗闇のなかに、ユウジのデスクの引き出しのなかで身を潜めている、ピンクゴールドのリングが光った。



※この作品はフィクションであり、実在の人物、団体等とはいっさい関係ありません。  
※本作品に関するすべての権利は著者本人に帰属します。また、無断での複製・改変・放送・上演等は固くお断りいたします。